

ナリーマン

ガザ地区北部から逃れ、南部のハーン・ユーニスで夫、そして三人の子供たちと共に避難生活が続けている。

---

『ガザでの地獄のような二年間…』

世界は、まだ耳を傾けてくれていますか？

私たちは二年間、路上で生きています。  
家もなく、安全もなく、  
焼けつく夏の暑さと、凍える冬の寒さの中で。

三人の子どもたちがいます。  
そのうちの一人は、戦争が始まったとき乳児でした。  
彼は爆撃と包囲の中で、寒さと暑さの中で育ちました。  
汚れた環境、砂、そして害虫に…  
小さな体は耐えられません。

彼には特別なケアが必要です。  
けれど、この場所には、  
「生きるための最低限」さえありません。

もう五か月も、子どもたちは果物を口にしていません。  
野菜も、キャンディのひとつさえも。  
それは存在しないからではありません。  
あまりに高すぎて、私たちには買えないのです。

私と夫はすべてを失いました。  
家を、夢を、思い出を、仕事を。  
子どもたちは、教育を失いました。  
お腹を満たす食べ物さえ失いました。

二年間、私は助けを求め続けてきました。  
支えてくれたすべての人に感謝しています。

けれど… 想像できますか？  
二年間、砂の上で暮らすことを。  
食べ物もなく、水もなく、  
体を洗うことさえできず、  
ただただ、救いを待ち続けることを。

どうか、私たちの声が届きますように。  
すべての生きた心に。

どうか、私たちを忘れないでください。  
ガザを、忘れないでください。

(ナリーマン 2025.8.3 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

アラ-

危険な戦闘地域であるアル・ザイトゥーン地区に路上で布製のテントで暮らし。  
父親の死後、21歳の彼女が一家の大黒柱として家族を支えている。

---

実現するために

私たちは、  
とても厳しい日々を生きています。

一切れのパンを手に入れることさえ、  
包囲と破壊の狭間を彷徨う――  
痛ましい旅となっています。

市場は閉ざされ、  
食べ物は足りない。  
誰もが、生き延びることに必死です。

私たちは支援を待っています。  
それが届くのか、  
それまでに私たちが生きているのか――  
それさえ、わからないまま、待っています。

母たちは、  
手に入るものがあれば、  
何であれ、  
痛む心を抱えながら料理します。

子どもたちは、  
空腹のまま、眠りにつきます。

夢に見るのは  
冷蔵庫がいっぱいになること。  
たったひとつのトマト。  
わずか一キロの小麦粉――  
ただ、それだけのことを私たちは願っています。

ガザでは、  
飢えはドアをノックしません。

飢えは、  
私たちと共に住んでいます。

私たちは

泣き声が  
愛する人の心を壊さぬように  
必死にそれを押し殺して生きています。

どうか、  
私たちの声を支えてください。

沈黙しないでください。

この飢えについて、語ってください。

この痛みを――どうか、知ってください。

(アラ－ 2025.6.21 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

テントの中のガザ ～太陽は慈悲を示さず、状況も見せない～

ガザでは、もはやテントは  
冒険の象徴でも、一時的な避難所でもありません。

それは、すべてを失った家族にとっての「家」となりました。

破壊された家。  
止まった夢。  
そして残されたのは――  
容赦ない太陽の下にある、一枚の布きれだけ。

気温が40度を超える暑さの中で、テントで暮らすことを想像してみてください。

電気もなく、冷房もない。  
冷たい水もない。  
子どもたちは熱せられた地面の上で眠り、  
女性や高齢者たちは、わずかなもので尊厳を守りながら生きようとしています。

ガザの人々は、テントを選んだのではありません。  
戦争を望んだわけでもありません。

それでも彼らは、  
「不可能」を忍耐に変え、  
「痛み」を尊厳に変え、  
「灼熱」を揺るぎない信仰へと変えています。

- ▲ 彼らのために祈ってください。
- ▲ 彼らについて語ってください。
- ▲ 彼らの物語を分かち合ってください。

――もしかしたら、世界が耳を傾けるかもしれない。  
――もしかしたら、希望が戻ってくるかもしれない。

(アラー 2025.6.24 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

「世界の自由な人々へ——」

私たちは、いま…  
虐殺されています。

血が流され、家は破壊され、  
私たちの人生は——ただの記憶に変えられてしまいました。

空には、爆撃機が飛び続けています。  
容赦のない爆弾が、次々と降り注ぎます。  
砲撃は止むことなく…私たちを打ち碎きます。

私たちは、消されようとしています。  
殺されようとしています。  
その悲鳴さえ——空へと消されてしまうのです。

だから、叫びます。  
自由な人々へ！  
人間性を持つすべての人々へ！

どうか——どうか、私たちの声を聞いてください。  
どうか、この苦しみを世界に伝えてください。

この沈黙は、続けてはならない。

お願いします…  
私たちが死に絶えてしまう前に——  
どうか、救ってください。

(アラー 2025.8.26 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

アラ-

危険な戦闘地域であるアル・ザイトゥーン地区に路上で布製のテントで暮らし。  
父親の死後、21歳の彼女が一家の大黒柱として家族を支えている。

---

実現するために

私たちは、  
とても厳しい日々を生きています。

一切れのパンを手に入れることさえ、  
包囲と破壊の狭間を彷徨う――  
痛ましい旅となっています。

市場は閉ざされ、  
食べ物は足りない。  
誰もが、生き延びることに必死です。

私たちは支援を待っています。  
それが届くのか、  
それまでに私たちが生きているのか――  
それさえ、わからないまま、待っています。

母たちは、  
手に入るものがあれば、  
何であれ、  
痛む心を抱えながら料理します。

子どもたちは、  
空腹のまま、眠りにつきます。

夢に見るのは  
冷蔵庫がいっぱいになること。  
たったひとつのトマト。  
わずか一キロの小麦粉――  
ただ、それだけのことを私たちは願っています。

ガザでは、  
飢えはドアをノックしません。

飢えは、  
私たちと共に住んでいます。

私たちは

泣き声が  
愛する人の心を壊さぬように  
必死にそれを押し殺して生きています。

どうか、  
私たちの声を支えてください。

沈黙しないでください。

この飢えについて、語ってください。

この痛みを――どうか、知ってください。

(アラ－ 2025.6.21 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

テントの中のガザ ～太陽は慈悲を示さず、状況も見せない～

ガザでは、もはやテントは  
冒険の象徴でも、一時的な避難所でもありません。

それは、すべてを失った家族にとっての「家」となりました。

破壊された家。  
止まった夢。  
そして残されたのは――  
容赦ない太陽の下にある、一枚の布きれだけ。

気温が40度を超える暑さの中で、テントで暮らすことを想像してみてください。

電気もなく、冷房もない。  
冷たい水もない。  
子どもたちは熱せられた地面の上で眠り、  
女性や高齢者たちは、わずかなもので尊厳を守りながら生きようとしています。

ガザの人々は、テントを選んだのではありません。  
戦争を望んだわけでもありません。

それでも彼らは、  
「不可能」を忍耐に変え、  
「痛み」を尊厳に変え、  
「灼熱」を揺るぎない信仰へと変えています。

- ▲ 彼らのために祈ってください。
- ▲ 彼らについて語ってください。
- ▲ 彼らの物語を分かち合ってください。

――もしかしたら、世界が耳を傾けるかもしれない。  
――もしかしたら、希望が戻ってくるかもしれない。

(アラー 2025.6.24 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

「世界の自由な人々へ——」

私たちは、いま…  
虐殺されています。

血が流され、家は破壊され、  
私たちの人生は——ただの記憶に変えられてしまいました。

空には、爆撃機が飛び続けています。  
容赦のない爆弾が、次々と降り注ぎます。  
砲撃は止むことなく…私たちを打ち碎きます。

私たちは、消されようとしています。  
殺されようとしています。  
その悲鳴さえ——空へと消されてしまうのです。

だから、叫びます。  
自由な人々へ！  
人間性を持つすべての人々へ！

どうか——どうか、私たちの声を聞いてください。  
どうか、この苦しみを世界に伝えてください。

この沈黙は、続けてはならない。

お願いします…  
私たちが死に絶えてしまう前に——  
どうか、救ってください。

(アラー 2025.8.26 翻訳・構成：藤田ヒロシ)

シャイマー・アフメド・アブ・アジュワ

ガザ地区北部から逃れ、南部のハーン・ユーニスへ。再び北部に戻り何度も非難をし、この9月ガザ市侵攻が始まった中でまた南部へと非難しました。夫、そして三人の子供たちと共に。

---

世界は目を覚ます必要があります——ガザは文字通り、消し去られようとしています。これはただの言葉ではなく、私たちが生きている残酷な現実なのです。

ガザにまだ残っている私たちは、容赦なく、恐ろしい爆撃の中で、刻一刻と消されていっています。人々は家を追われ、行き場を失った家族たちで街は溢れています。

私たちに、これ以上何が起こればいいというのですか？

なぜ誰も手を打たないのですか？

なぜ誰も行動しないのですか？

アラブの人々はどこにいるのですか？

ムスリムはどこにいるのですか？

そして、人権を声高に説き続ける西側は、一体どこにいるのですか？

ここでは、死がむしろ救いになっています。

亡くなった人を羨むのです。なぜなら生き残った人々は、毎日、何百万回も心が死んでいくからです。

もう、一体何を恐れればいいのかさえ分かりません——

飢えか、爆撃か、追放か、それとも路上に何も持たず閉じ込められることか。

どれだけ書いても、どれだけ叫んでも、あなたには私たちの苦しさのほんの一部さえ感じることはできないでしょう……。

私たちには、神しか残されていません。

حَسْبُنَا اللَّهُ وَنِعْمَ الْوَكِيلُ

(Hasbunallahu wa ni'mal wakeel)

(ハスブナッラー ワ・ニウマル・ワキール)

アッラーこそ、わたしたちにとってすべて。

わたしたちを委ねるにふさわしい、最良の守り手

(シャイマー 2025.9.10 翻訳・構成：藤田ヒロシ)